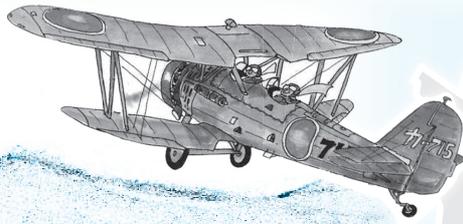


予科練 平和記念館だより



予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍に関するお話しや写真を集めています。ご存じの人はぜひご一報ください。

前

号のつづき…昭和20年6月10日、土浦海軍航空隊（土空…現在の自衛隊武器学校一帯）を目標とした大規模な空襲を体験した元看護婦さん3人の体験談を紹介しています。空襲と機銃掃射を受けてけがをした隊員の手当てをするため、彼女たちは危険な状況の中防空壕へと走っていきました。

●土空の天使（後半）

「…青宿に行けって言われて（青宿の鹿島神社下には、土浦海軍航空隊の大きな防空壕がありました。）青宿から今度はあんたたち適性部（現在の土浦三高）に行きなさいって言われて…」当時適性部の高台には横穴の防空壕が掘られていましたが、昭和20年6月10日の時点ではまだ完成していませんでした。薄暗く水の滴り落ちる未完の防空壕に、次々と空襲の負傷者が運ばれてきます。

「まだできあがらないんですよ、壕が。だから水滴がぼたぼたぼた落ちるんですけど。そこへ患者さんを寝せて、点滴やなんかをやって。「看護婦さん、水くれよー」ってね、怒鳴られてもね、何

もやってあげられなくてね。かわいそうだったね。」「もうね、啞然と立ってる若者がいて。…あの顔は思い出すわ。」「いやー…ほんとに、あの適性部のね…地獄ですね。」

とにかく自分たちのできることに全力を尽くすしかない。彼女たちは食事も忘れて夢中で看護にあたりました。

「夢中で働いてね、それで夕方になったので、また医務室のほうに帰ろうってことで（土空に）帰ったら、そうしたらもうなんにも燃えちゃってないんですよ。全部。すべて燃えちゃったもんね。」

この日、250キロ爆弾による二度の空襲を受けた土空は、民間人を含めた多数の死傷者を出しました。米軍が作成した空襲の報告書を見ると、隊内の建物の約40%が全壊したことがわかります。爆弾での被害に加えて、建物のほとんどが木造だったため、食事を作る炊炊所から出火して大火事になったのです。隊に戻った看護婦さんたちが夕暮れの中見たものは、その惨劇を如実に物語っていました。

（「地面に」ごろごろと

転がってるのが…その…兵隊さんなんです。焼け焦げた。」

この約2か月後日本は終戦を迎え、土空も解散されました。看護婦さんたちも母校へ帰ったり、ほかの病院に採用になったりとそれぞれの道へ進みました。お話をしてくださった森戸すゑさん、角田しづ子さん、栗原志津子さんは、戦後日本国外から帰ってくる人たちを迎えに行く引き揚げ船に看護婦として乗船し、皆と力を尽くされました。土空の天使は、日本の天使でもあったのです。彼女たちの暖かい笑顔に、疲れきった人たちがどれほど元気づけられたか想像に難くありません。



▲右から：角田しづ子さん・森戸すゑさん・栗原志津子さん

また今年も6月10日がやってきます。この時期の霞

ボランティアを募集します

町では、昭和のくらしや予科練をテーマとした特別展を8月に開催する予定です。つきましては特別展を応援してくださるボランティアを募集します。

- 期日：7月30日（水）～8月19日（火）のうち数日
- 時間：午前9時～午後5時まで（午前・午後のみ可）
- 募集人数：資料展示・片付けのアシスタント（力仕事があります）・展示監視・特別展のPR ――など3名程度
- 申込方法：町ホームページ内予科練平和記念館整備推進室のページから申込用紙をダウンロードして郵送

ヶ浦沿いの田んぼでは、稲が涼やかに風にそよぎ、ハス田からはするすると葉が顔を出します。カエルの大合唱を聞きながら、家々のアジサイもそろそろと色をかえていきます。霞ヶ浦は波穏やかに空を映してかがやき、梅雨までのつかの間、の光を楽しんでいます。穏やかな、そしてのどかな風景が、63年前「地獄」となった日があったことを忘れてはいけないうよ、と静かに語っているようにも思えます。